

学生は何が分からないか

— 分からなさの型 —

池田 久美子

本を読ませ、「疑問・分からないことを書きなさい。」と指示する。それに応えて学生は、自分が分からないと感じる事柄を書く。

この、学生が分からないと感じる事柄は、多様である。だから、それぞれの分からなさに対してどう指導すべきかも、多様でありうる。どう指導すべきかを考えるためには、学生の分からなさの実態を知らなければならぬ。分からなさの実態¹は症状に基づいて、どこでどうつまづいているかを診断しなければ、的確に指導²治療することは出来ない。学生の思考の実態を診断する³診断学が必要である。

本稿では、学生が分からないと感じる事柄を分類する。分類してみると、そこに複数の型を見出すことが出来る。この型は、指導方法の違いに対応する。型が違えば、指導方法はそれに併せて変わる。型は、的確な指導方法を構想するための手がかりである。

事例として取り上げた学生の文章は、次の本のいずれかについて書かれたものである。

1 妹尾河童『少年H 上巻』（講談社文庫）一九九九年刊

2 遠藤周作『海と毒薬』（新潮文庫）二〇〇〇年刊

3 渡辺淳一『遠き落日 上・下』（角川文庫）一九九二年刊

（本文中のルビは外して引用した。）

一 用語の意味・事柄を知らない

① 「なに？ これか。迫撃砲だよ。中支でね、チャンコロにやられてね。」（『海と毒薬』一一二頁）中支とはどこか。また、チャンコロとは何か。

② 「いつも『天皇陛下のために』とっている。『在郷軍人の小父さん』や、子どもを見ると『あっちへ行け！』と竹竿を振り回して追いはらっている。『玩具の弓屋のオヤジ』などがいた。」（『少年H』一五頁）「在郷軍人」とは何か。

③ 「思想犯やから特高の調べもきついで」（『少年H』二五頁）

「思想犯」とは何か。「思想」は分かるが、それに「犯」がつくと、どんな意味になるのか。

最も多いのが、この種の分からなさである。用語の意味が分からないのである。右のほかにも、「憲兵」「警防団」「耶蘇教信者」「赤（アカ）」などがある。いずれも、戦前・戦中事情についての無知ゆえである。学生は、この種の歴

史的知識の蓄えが無い状態である。つまり、学生の側に、戦前・戦中用語のコード (code) 自体が存在しないのである。学生は、自分で辞書・事典を引いて調べるべきである。また、戦前・戦中事情が具体的に描かれている本を多読するべきである。例えば、石川達三『生きてゐる兵隊』を読めば、「チャンコロ」とは何かが分かる。その言葉を用いている状況も知りうる。広く読むことにより、戦前・戦中事情に関するコードシステム (code system) を作るべきなのである。

『少年H』は総ルビであり、漢字の読み方・音は子どもにも分かるよう配慮されている。しかし、漢字の音は分かっていても意味が分からない、という事態が一般的に在る。事柄を知らないから読めないのである。戦前・戦中用語の解説・註が必要である。)

二 言表・叙述の裏が分からない

- ① 「Hは、タンバリンの音が嫌いだった。タンバリンの音を三歳のころから聴いていたが、小学校に入ってから急に嫌いになりはじめたのだ。」(『少年H』二八頁) Hはなぜ、小学校に入ってから急に嫌いになったのか。

次は、学生が取り上げた箇所が続く一節である。

Hは、タンバリンの音が聞こえてくると路地に逃げこんで、友だちの目から隠れた。

タンバリンの音は、いつも太鼓の音に混じってだんだん近づいてきた。キリスト教の街頭伝道の一隊がやってくる

音なのだ。太鼓を叩いているのはマルヤ薬局の山岡の小父さんで、タンバリンを叩きながら人一倍大きな声で賛美歌を歌っているのが、Hの母親の敏子だった。

一隊が行進する範囲は広く、Hが通っている長楽小学校の周辺の道は全て回っていたから、学友のだけれど、タンバリンを打ち鳴らしながら歩くHの母親の姿を知っていた。

翌日、決まって数人に取り囲まれ、「アーメン、ソーメン、冷やソーメン、信ずるもーのはだれもー、みーな救われん」と囃したてられることになっていた。

Hは日曜日には必ず教会へ通っていたから、「アーメンの子」とからかわれることに慣れっこにはなっていたが、タンバリンが鳴り響いた日の次の朝は、かなりしつこかった。うんざりしたHは、いままでに何度となく母親に、「教会へ行かんといてとはいわへん。ぼくも日曜学校はやめんと行くけど、タンバリン叩いて歌いながら町を歩くのだけはやめてよ」と頼んだが、無駄だった。

そのたびに彼女は不思議そうな顔をして、「なんで？ 神様のことを知らない人たちに教え、導いてあげているんやから、ちょっとも恥ずかしがることなんかないよ」といった。

（『少年H』二八〜二九頁）

「小学校に入学してから嫌いになったのは、○○だからである。」という類の説明は、右の一節のどこにも無い。作者は説明・解説を加えてはいない。つまり、その理由を論じてはいない。作者がしているのは、出来事の叙述である。解説抜きの、出来事の提示 (presentation) である。Hが何に悩まされているのか、学友たちが敏子のタンバリンにどう反応しているか、敏子がHの訴えにどう答えているか……。書かれているのは、こうした出来事の束である。

読者は自ら、理由を推定するのに必要な情報を、一連の叙述の中から掴み出さなければならぬ。そして、それを総合し、組み立てなければならぬ。つまり、自らこれらの叙述を総合し、理由を推定しなければならない。

学生は、右の一節をどう読んだのか。Hが小学校入学以来、タンバリンを嫌うようになったのだから、小学校に関わる叙述を見逃してはならない。「一隊が行進する範囲は広く、Hが通っている長楽小学校の周辺の道は全て回っていたから、学友のだれもが、タンバリンを打ち鳴らしながら歩くHの母親の姿を知っていた。」は、特に重要な叙述である。翌日、「アーメン、ソーメン、冷やソーメン、……」とHを嘲したてた「数人」は、この「学友」である。この、Hを悩ませた一連の出来事から、小学校入学以来タンバリンを嫌うようになった理由は、比較的容易に想像がつく。学生は、この叙述を「理由―結果」の思考の枠組み（カテゴリー＝category）に位置付けることが出来ない。「理由―結果」カテゴリーの働きが、弱いのである。

- ② 「意外なことに母親は怒らなかった。」（『少年H』七八頁） どうして敏子は大切なフォークの歯が折られてしまったのに、Hを怒らなかったのか。

敏子が怒らなかった理由を想定することは、①よりもさらに読者の側に思考を要求する。何しろ、Hにとってもそれは「意外」だったのだ。Hにすら見えていない理由を、読者は、Hの助けを借りずに想定しなければならぬ。

このフォークは、敏子が懇意にしていたアメリカ人宣教師、ミセス・ステープルスからの贈り物である（六六頁）。敏子は、ミセス・ステープルスを真似て、胸にイニシャルを刺繍したセーターをHに編んでやるなど、前々から外国の

文化に強い憧れを抱いている人物であった(一〇〇―一一頁)。その敏子にとって、この銀製のフォークは、一緒にもらったナイフや皿とともに、憧れの外国の象徴だったのだ。

Hは、そのフォークが「くすんでいた」のが気になり、歯磨き粉で磨いてみた。「磨くと本当にピカピカになった。Hは嬉しくなって、次々と何本も磨いていった。」(七八頁) このHの嬉しさは、敏子の嬉しさでもあったはずである。憧れの象徴であったフォークが輝きを取り戻したのである。敏子の心は充たされ、鷹揚に振る舞う余裕が生まれていた。しかも、都合のよい解決法がひらめいた。

「これから、それをあんたのにしなさい。目立ってええわ」(七九頁)

歯の折れたフォークは、Hが使うことにすればよい。敏子が無傷でピカピカに輝くフォークを使う喜びは、損なわれずに済む。敏子が怒る訳がない。

読者は、敏子の人物像を明瞭に作るべきである。外国への強い憧れ、感情の起伏の激しさ、無邪気な自己中心性――これらの際立った特徴を明瞭に意識するべきである。そしてまた読者は、フォークが担う意味・その来歴を読み取るべきである。憧れの象徴としてのフォークである。つまり、必要なのは、敏子の人物像とフォークの象徴的意味である。これらを根拠にして、初めて、敏子が怒らなかつた理由を想定することが可能になる。

敏子の人物像とフォークの象徴的意味を捉えるには、①のように単純に特定の一節を読めば済む訳ではない。作品全体の叙述において読者が自ら構想しなければならぬのである。これは、①以上に強い構想力を要する仕事である。学生は自ら、作品の膨大な情報の束から有用な情報を掴み出さなければならぬ。そして、それを一つのまとまった論に組み立てなければならぬ。学生はそこでつまづいている。

三 作品の側に不整合、破綻が生じているから分からない

——分かるべきではないことの発見——

① 「叫んでからそれがあの生体解剖の日に米人捕虜がベッドで哀願した言葉と同じだったことに気がついた。」
〔海と毒薬〕二六頁）なぜ私は、生体解剖の日に米人捕虜がベッドで哀願した言葉を知っていたのか。また、本当に同じ言葉だったのか。

「私」は生体解剖の現場に居合わせなかったのだから、「米人捕虜がベッドで哀願した言葉」など、知る由もない。「私」は戦後になって、偶然「勝呂」が生体解剖に参加したことを知った。「私」は、当時の新聞を読み、事件の詳細を知る。その新聞記事に、「米人捕虜がベッドで哀願した言葉」が書かれていたのだろうか。「私」がそれを知るとすれば、その新聞記事以外にはありえない。しかし、そんな記述が新聞にあったとは書かれていない。

「私」が叫んだセリフとは、「麻酔をかけて下さい」である。「米人捕虜」はこの「麻酔をかけて下さい」というセリフを言ったのだろうか。

作者は次のように書いている。

手術室に二人〔勝呂と戸田〕をよび寄せると助手は部屋の戸をしめた。「困るよ。全くねえ。あんなに将校の連中が来られたんじゃ。病棟の患者たちに気づかれるしな。第一、捕虜が警戒しちゃうじゃないか。〔略〕」彼はそう、不平を小声で洩らすと戸棚をあけてエーテル麻酔薬をとり出した。

「君たちは麻酔をやってもらいたいんだ。いいかね。今日の捕虜は肩に負傷しているんだ。こいつが騒ぎだすと困るんだよ。だから最初、奴がきたら僕が軽い診察のマネをするからね。最後に心臓を調べるといって手術台に寝かせてくれないか」

『海と毒薬』一二七〜一二八頁

捕虜を騙して麻酔をかけることが画策されていたのである。そして、事態はその筋書き通りに進行する。作者は書く。

浅井助手が聴診器を当てると、捕虜は迷惑そうに眼をつむったが、突然、部屋に漂った臭いを感じたのか、

Ah! Ether, isn't it? (エーテルだな)

と叫んだ。

Right, it's for your cure. (そうだ。お前の治療のためだ。)

浅井助手の声も聴診器を持った手も流石に震えていた。

診察が進むにつれて捕虜は落着きはじめてたのか、指図通りに従った。そのやわらかな碧い眼や時々うかべる人懐っこい微笑から彼が勝負たちを毫も疑っていないことがわかった。医者という職業にたいする信頼がこの捕虜をすっかり安心させているらしい。心臓を調べると説明しながら助手が手術台を指すと、素直に横になった。「略」エーテルの液体をたらず。捕虜が左右に首をふってマスクをはずそうとした。

「バンドをしめるんだ。バンドを」

『海と毒薬』一三〇〜一三一頁

捕虜は本能的に麻酔を拒絶しようとする。医師たちはそれを抑えつけて麻酔をかける。捕虜はこの時「麻酔をかけて

下さい」と哀願などしていない。その可能性も全く無い。仮りに新聞がこのセリフを捕虜が叫んだと報道したとしたら、それは虚報、誤報の類である。「見てきたように嘘を言う」の類である。「私」はそんなものを真に受けて、思わせぶりの解説をし、自己陶醉する狂言回しに過ぎなくなる。

「麻醉をかけて下さい」は、物語の展開を暗示するきわめて象徴的なセリフである。それなのに、この重要なセリフが右の場面では何の痕跡も留めていない。作品の統一性を欠いている。

①は、学生が読めないがゆえに出てきた疑問ではない。作品の側に原因がある。作品が統一性を欠き、破綻しているのである。いわゆる御都合主義に陥っているのである。学生が分からなかったのは当然である。誰もが分からないと感じるべきなのである。

この種の分からなさは、批判に近い。作品の側の問題点の発見である。作品の内部矛盾の指摘である。

四 作品の叙述が自分のコードシステムに整合しない

——異なるコードシステムに置き換える——

① 「親が強引に決めた結婚話を、敏子が承諾させられたのは、十八歳のときだった。」（『少年H』二一八頁）どうして昔は自分の子どもの結婚を親が決めてしまうのか。しかも、敏子は十八歳というまだまだ子供と言ってもよい年頃だ。親は敏子の幸せを考えて、ではなく妹と弟のことを考えて決めたということが何とも疑問だ。

② 「盛夫は、目の前で涙を流しつづける新妻を見て、辛かった。自分との結婚を喜んでいないことは前からわかっ

ていたが、『これじゃ、まるで人買いのようだ』と思った。」「〔少年H〕三五頁）盛夫自身はこの結婚をどう思っていたのか。家のためだけで結婚したのか。それとも、敏子のが好きだったのか。もし、好きで結婚したのなら、目の前で泣かれて、ただ辛いだけか。悔しくはなかったのか。

盛夫と敏子の結婚の経緯いきまつは、学生にとってかなり理解に苦しむ部分であるようである。学生は、自らの結婚観（結婚のコードシステム）と比べて、登場人物たちの結婚観が大変異質であると感じる。そして、両者の接点をどうしても見出せない。

結婚は、基本的には何より本人同士が決めるものである。親たる者は皆、子どもの幸せを第一に考え、願うはずである。本人たちの意思を無視して親が独断で事を運ぶなどということは、あり得るはずがない。そんな権利は絶対に無い。

——学生の結婚観は、大体こんなものである。

これに対して敏子の親は、家の都合や外目の釣り合い程度で勝手に話を決め、結婚を強いる。親たるもの、どうしてもそんなことが出来るのだろうか①の学生は思う。これは、学生の考える「親」の範疇を超えている。

また、盛夫は敏子のことをどう思っているのだろうか。普通、恋愛感情抜きで結婚を決意したりは出来ないはずだと、②の学生は考える。盛夫の場合はどうだったのか。学生は、盛夫の結婚観を想像することが出来ない。

結婚は、個人の問題ではなく、あくまでも家の問題であった。また、女子は家長である父親の意向に従うべき存在であった。自ら主体的に人生を選びとる自由が女子にあるなどとは、一般には考えられてはいなかった。これが、当時の社会通念であった。（自由恋愛、恋愛結婚などは、特殊な一部の問題であった。それを実践したり主張したりすることは、社会通念からの逸脱を意味した。それなりの覚悟と代償を要した。）敏子の親は、この社会通念において、全く

常識的に事を進めただけであった。そして、盛夫も、この社会通念に殊更抵抗する必要は無かった。

盛夫は、きわめて健全な常識の持ち主であった。次男坊であった彼は、尋常高等小学校を出てから、洋服屋の丁稚奉公に出る。これは、当時の次男坊にとって、ごく普通の、まことに当然の生き方であった。辛抱して手に職をつけた彼は、やっと独立を許される。これ又ごく普通の生き方として、彼は、所帯を持つべき時期が来たと思ったであろう。彼にとって、恋愛感情の有無よりも、所帯を持って一人前という常識に従う生き方こそが重要であった。彼は結婚にロマンスを求める質の男ではなかった。

盛夫は、当時としても背が低く、しかも、足に障害を持っていた。徴兵検査は、丙種合格でしかなかった。生真面目で風采の上がない、地味な人物が所帯を持つ道は、親戚縁者が世話してくれる縁談に乗ることをおいてなかったであろう。敏子さえこの縁談を受け入れ、自分とささやかな所帯を持つ気になってくれれば、盛夫はそれで充分幸せであったはずなのである。

しかしまた、盛夫は懐の深い、情のある人物であったようである。だからこそ、「目の前で涙を流しつづける新妻を見て、辛かった」。盛夫は敏子をいたわり、辛抱して、平凡な家庭生活を営み続ける。盛夫は、その点で成熟した、なかなか出来た人物であった。不如意に耐えることを知っていた。

作品では、当時の結婚観・社会通念が完結したコードシステムとして働いている。登場人物たちの言動は、そのコードシステムにおいて解釈すると、整合的で安定した意味を持つものになる。盛夫は、そのコードシステムを受け入れ耐えることの出来る男である。これに対して、敏子は、それを受け入れ耐えることが出来ず、宗教に救いを求める女である。そして、敏子の父親は、そのコードシステムの外側にはおよそ縁の無い男であった。父親にとっては、そのコードシステムにおいて結婚を取り仕切ることこそが、親としての情なのであった。

これに対して学生は、全く異なるコードシステムにおいて解釈しようとする。異なるコードシステムにおいて解釈すると、登場人物たちの言動は、右とは違う意味を担うようになる。盛夫は、敏子に惚れていたのかどうかも分からぬ不可解な男に見えてくる。また、敏子の父親は、親としての情の無い、非常識で身勝手な人物に見えてくる。学生の抱く「親」「結婚する男」のコードと登場人物たちの言動との間に、矛盾・対立が生じる。

「三」で取り上げた型の分からなさ、すでに指摘したとおり、作品の側の内部矛盾の発見であった。これは、作品の内在的批判に成長し得る。これに対して、「四」の型は、作品の叙述と読者のコードシステムとの間の矛盾から生じる。これは、作品に対する外在的批判へと向かい得る。

もちろん、「四」の型の分からなさの主たる原因は、作品におけるコードシステムを捉え損ねているところにある。「二」の型の場合と同様に、学生は、戦前・戦中事情が具体的に描かれている本を多読し、当時の一般庶民の結婚観を知るべきである。自分のとは違う、異質のコードシステムの存在を、学生は知るべきである。

しかし、作品を複数の異なるコードシステムにおいて解釈する自由は、読者に保証するべきである。学生に対しても、同様である。必要なのは、作品におけるコードシステムと他のコードシステムとの異同を自覚することである。そのためにこそ、まず、作品におけるコードシステムを知らなければならぬのである。比較する対象が分からないのに異同を自覚することは出来ないからである。異同を自覚した上で、敢えて作品とは違うコードシステムに置き換えて作品を読んでみる。作品の外に出てみる。すると、今まで気づかなかった作品の限界が見えて来る。学生に対して、このような読み方の可能性を開くべきである。

五 作品の叙述から目が浮く

① 『成功』

当時の青年はよくこの言葉をつかった。」（『遠き落日』上巻 一一七頁）

いつの時代にも、「若者言葉」、「流行語」というものがあつたのか。他にも何かあつたのだろうか。

『遠き落日』では、話は次のように展開する。

「いっそのこと、先生が高山院長から病院を受けついで、自分で経営なさってはいかがでしょう」

「わたしがか？」

守之助が呆れるのに清作はけろりとして、

「高山先生は、お忙しい方だし、病院経営のような下世話なことは、性に合わねえんだと思います。だから先生が任せて欲しいと申し出れば、許してくださると思うのです。あの病院が儲がらねえわけはありません。先生が専心して経営に当たられたら、いまよりずっと楽になります」

「それで、どうするのだ」

「ほうしたら、先生の給料はずっと上がるでしょうし、わだしへの十五円も……」

守之助は唖った。なんとという突飛なことを考えるのか。前回、小遣いを二円アップしたときも、院長に給料増額を要求せよとけしかけたが、今度は病院経営権までとってしまえというのである。それでお前も楽になるし、自分も安

心して金をもらえるとという理屈である。

〔遠き落日〕一一四〜一一五頁〕

けしかけられた守之助は、半信半疑、恐る恐る院長に申し出る。ところが、この申し出が清作の筋書き通り、受け入れられるのである。

守之助は多少の脈ありと見て、清作の調べたデータをもって、さらに院長を口説いた。こうして一カ月のあと、高山院長はついに守之助の申し込みを受け入れ、経営のすべてを任せることに納得した。

「成功」

当時の青年はよくこの言葉をつかった。いかにも明治の気概に溢れたセリフだが、いまの二人はこの言葉どおりの気持だった。

「やってみればなんとかなるものだなあ」意外な進展に、守之助は述懐すると、

「人間、その気になれば、出来ねえごどはほとんどありません」このあたり、弱輩の清作のほうが、一枚上だった。

「それでは、来月からわだしに十五円いただけますね」〔遠き落日〕一一六〜一一七頁 波線引用者〕

確かに、右をどう読んでも、「いつの時代にも、『若者言葉』、『流行語』というものがあつたのか」は分からない。また、当時、「成功」の他にどんな「若者言葉」があつたかも、分からない。そんなことはどこにも書かれていない。だから、分かる訳が無い。

しかし、それが書かれていないと、何か問題が生じるか。それは、作品に不整合・破綻をもたらす事態なのか。

まさか、である。『遠き落日』は、「若者言葉」通史の書ではない。あるいは、「明治における『若者言葉』」集でもない。野口英世の生涯をたどり、その人間像を独自の視点で描いた小説である。英世個人の生き方を描き切れればよいのである。その目的にとって、「いつの時代にも、『若者言葉』、『流行語』というものがあったのか」や、当時、「成功」の他にどんな「若者言葉」があったかなどという記述は、全く不要である。そんな記述があったとしたら、逆に、それは話の筋を乱す夾雑物となる。

作者は、「成功」という語を何のために持ち出したのか。「若者言葉」通史を記述するためでもなければ、「明治における『若者言葉』」の例を列挙するためでもない。「成功」のくだりに続いて、「いかにも明治の気概に溢れたセリフだが、いまの二人はこの言葉どおりの気持だった。」と書いてある。清作の大胆な発想が筋書き通りに実現し、彼と守之助は驚喜する。この二人の気持を象徴するのが、「成功」という語だったのである。「成功」は、二人の気持を的確に表現するために持ち出された語である。

学生の疑問は、この作品の構造を無視するから出てきた疑問にすぎない。「成功」 当時の青年はよくこの言葉をつかった。」を作品の構造から切り離し、それとは無関係に筋違いの問いを立てたにすぎない。これは、つまみ食いである。作品の叙述から目が浮いているのである。

こんなつまみ食いが許されるのならば、いくらでも「分からない」と言いうる事柄はある。当時の女性はどうな言葉をよく使ったのか、「成功」という語があまり使われなかった時代はいつか、当時の人々は「成功」という漢字をいつ学習し、それにどんなルビをふったのか、……。際限が無い。

作者が何を書き、何を書かないか。その選択の基準・方法を問うべきである。書かないという事態の意味が、重要なのである。書いていない事柄を無基準に問う思考は、書かないという事態の意味を問う思考を妨げる。基準を失った思

考は、恣意的な連想を招くだけである。①は、まさにその例である。

② 「この依怙地なまでの完全主義は、〔中略〕孤独で唯我独尊的な仕事に走らせる結果ともなった。」

（『遠き落日』下巻四二頁）

協調性がなく、社会に不適応な性質の英世が、仕事の実績で評価されている。生きていく上で大切な事はどちらなのか。

「社会に不適応な性質の英世」と学生は言う。これは、思い込みである。作品を読めば分かる。英世は社会一般に不適応だったのではない。少なくとも、アメリカ社会には適応した。アメリカ社会に適応したからこそ、英世は、アメリカに本拠地を置き、実績を上げることが出来た。その実績に対して、かなり正当な評価を受けることも出来た。英世は、頭脳流出の典型であった。

英世は、日本社会では、学歴による差別を受けた。また、出身地、門地による差別も受けた。手の障害に対する差別も受けた。もし彼が、東京帝国大学に学び、薩長の士族の出であったなら、人生は全く違っていたはずである。そうであったなら、英世は日本社会の主流に乗り、順風満帆で出世コースをたどることが出来たであろう。つまり、英世が「社会に不適応」だったのではない。日本社会が彼を受け入れることが出来なかったのである。日本社会には、異端を受け入れる懐の深さ、包容力は無かった。

学生は、日本社会とアメリカ社会との違いが読めていない。これでは、英世の世（日本社会）にいれられない苦悩と絶望は分からない。その苦悩と絶望をバネにして這い上がっていった彼のエネルギーも、見誤る。なぜアメリカで彼が

成功したかも、掴めなくなる。英世が渡米を決意したのは、協調性の無い性格が災いした結果だとしか読めなくなる。まことに矮小な野口英世像である。

学生は、「協調性」・「社会への適応」と、「仕事の実績」とを対立させ、「生きていく上で大切な事はどちらなのか」と問う。学生にとって、両者は二者択一しうるものなのである。しかし、右に見たように、両者はこんな単純な図式には収まらない。英世の場合、「仕事の実績」はアメリカ「社会への適応」の結果であった。あるいは、アメリカ「社会への適応」の具体的な現われが、「仕事の実績」であったのだ。二者択一論は、到底成立しない。作品から目が浮くから、思い込みを正すことができないのである。「生きていく上で大切な事はどちらなのか」は、読み誤りの上に成立した、疑似問題 (pseudo problem) である。

註

(1) 「座談会 きちんと診断学を学びたい」(『週刊医学会新聞』Vol.15 No. 9 医学書院 二〇〇〇年九月二十五日)では、医学ならびに医学教育における「診断学」(medical diagnosis)の現状と展望を論じている。患者の訴えから診断を導き出すための方法、その理論的基礎、そしてそこで働く思考の問題は、教育研究においても大変示唆的である。

(2) 例えば、その試みとして――

池田久美子「『夕焼け』の授業における『自我』の欠落——文化的同調の要求——」(信州豊南女子短期大学紀要)第二号 一九八五年三月一〇日)